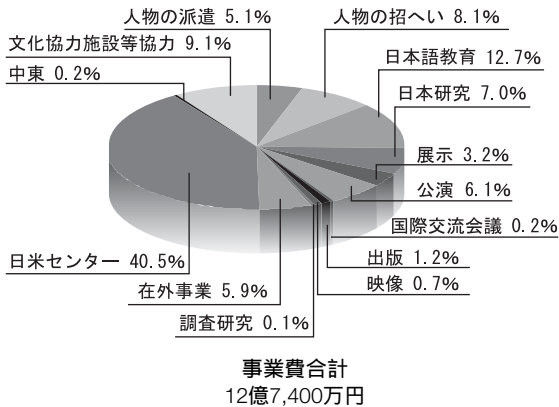


北米

概要



2003年度に北米向け事業に充当された事業費は、約12億7,400万円で、対米事業費は基金事業費全体において最大の割合を占めるとともに、対カナダ事業費も昨年とほぼ同程度の割合を占めている。

今年度は、米国との間で「日米交流150周年」、カナダとの間で「日加修好75周年」を迎え、それぞれ各種記念事業を各分野で実施した。

知的交流分野では、日米交流150周年記念事業「日米同盟の再定義」をニューヨークの日本協会と共催で、「日加国交樹立75周年記念シンポジウム」をトロント大学と共催で開催し、好評を博した。

また、市民交流分野では、日米交流150周年を記念し、日本語教育用マルチメディア教材を利用し、社会科学系の授業で日本理解教育を行なうためのレッスンプランを開発・展開する、日本理解教育プロジェクト「Snapshots from Japan: 7人の高校生の素顔」を実施した。

日本研究分野に関しては、米国については在米諮問機関であるAAC (American Advisory Committee) の審査・提言を仰ぎ、プログラム改善を進めており、カナダについてはカナダ大学協会と共同で、日本研究機関助成事業を実施している。今年度は北米の日本研究調査を実施し、今後この結果を基に、より効果的な事業の遂行を図っていく。

日本語教育分野では、教師・研究者の育成とともに、そのネットワーク形成・強化に向け、引き続き支援を行なった。

日本文化紹介、芸術交流分野では、現地の文化・芸術機関との連携・協力を進めつつ、今年度は、NYのJapan Societyや、Korea Foundationなどと共催で「日韓初期仏教美術展」を実施したほか、海外展助成としてメトロポリタ

ン美術館の「織部の芸術と桃山文化展(The Art of Oribe and Momoyama Culture)」などを支援し、各事業は米国主要紙において高く評価された。さらに、日本文化紹介派遣主催事業として、邦楽公演、アニメーション講演会を各地で実施したほか、対米向け公募プログラム「パフォーミング・アーツ・ジャパン」により、「野村万作と『万作の会』」など7団体が、北米25都市を巡回、2万人以上の観客を動員し、メディアの注目を集めるとともに、高い評価を得た。また、パークレー交響楽団と田中カレン氏など6件の共同制作も実施し、新作はいずれも中間発表の段階から、観客とプレス注目を集めた。

基金が日本側事務局を務める日米文化教育交流会議(カルコン)については、11月に仙台において第21回合同会議が開催され、デジタル文化ワーキング・グループによる提言と報告を始め、各種報告および討議が行なわれた。また、これに合わせて「文明間対話における市民の役割」をテーマに記念シンポジウムを行なった。

海外事務所報告

カナダ

トロント日本文化センター

1. 概況

2003年のカナダは、新型肺炎(SARS)の流行に始まり不安要素が多い一年となった。また2001年の同時多発テロ、SARSの流行などの影響を受け長期にわたる経営不振に拍車がかかり、カナダ最大手航空会社エアカナダが破産保護法を適用、会社更生手続きを申請した。一方、アルバータでは狂牛病が確認され、アメリカ、日本などがカナダからの関連製品の輸入を禁止する措置を取った。政治面では、10年間にわたり首相を務めたジャン・クレティエン氏に代わり、ポール・マーティン氏が第27代首相に就任した。同首相は国民生活の向上に資する社会基礎の強化、21世紀の経済構築、国際社会に貢献するカナダの役割の確立を3本柱に新内閣を発足した。GDP成長率は昨年より1.6%減の1.7%にとどまった。文化面では、ドゥニ・アルカン監督の“The Barbarian Invasions (邦題：みなさん、さようなら)”がカンヌ国際映画祭で最優秀脚本賞、最優秀女優賞、アカデミー賞で最優秀外国語映画賞を受賞し、世界的に高い評価を得たほか、“Seducing Doctor Lewis”、“The Corporation”がサンダンス映画祭でそれぞれドラマ観客賞、ドキュメンタリー観客賞を受賞し、カナダ映画の興隆が目覚しい一年であった。



日韓初期仏教美術展



織部の芸術と桃山文化展

2. 日本との文化交流事業

カナダでは日本のポップカルチャーの継続的な人気に加え、伝統文化に対する需要も高く、両者がさまざまな形で紹介されている。2003年は日加修好75周年に当たり、大型事業として狂言レクチャー・デモンストレーションが東部カナダ各地(オタワ、モントリオール、トロント)を巡回、トロントでは桂歌丸氏率いる一団が落語公演を行なった。またカナダを代表するピアニスト、イブ・エゴヤン氏が近藤譲、藤枝守両氏に委嘱した新曲の初演を行なった。日本の現代文学も積極的に紹介されており、トロントで例年行なわれる国際作家祭に江国香織氏、リーディングシリーズには高橋源一郎氏が参加し自作の朗読、公開インタビュー、サイン会を行なった。大型書店ではグラフィックノベルのコーナーが設けられ、日本漫画の翻訳版が並び、漫画の普及は更なる拡大傾向にある。ほかに『千と千尋の神隠し』とケーブルテレビで放送されカルト的人気を得た『カウボーイビバップ』の映画版が劇場公開されたほか、カナダ3大映画祭(バンクーバー、モントリオール、トロント)では計39本の日本映画が上映された。そのうちの1つであるトロント国際映画祭では、観客投票による最優秀作品賞に北野武監督『座頭市』が選ばれた。

3. トロント日本文化センターの活動

<活動方針>

日本の27倍という広大な国土を有するカナダでは、ケベック州を中心とするフランス語圏とそれを取り巻く英語圏の共存に加え、さまざまな民族グループの背景文化を容認する多文化主義を掲げている。センターではこれらの特性に留意し、各地の公館やカナダ側の公的機関の協力を得つつ、基金事業の円滑な遂行に努めている。芸術交流・文化紹介事業では、カナダ側の文化・芸術機関と連携し波及効果の高い事業実施に注力した。またカナダ側のニーズを吟味し、伝統と現代のバランスにも考慮し事業を実施した。日本語教育・日本研究支援事業に関しては、長期的視野に立ち、全国レベルでの専門家間のネットワーク形成や将来の日加交流を担う人材の育成に資する事業を重点的に行なった。対カナダ日本研究特別事業に関しては、現地事情に即した事業実施のためカナダ大学協会との共同事業として実施した。

<2003年度事業例>

- 狂言レクチャー・デモンストレーション(2003年9月23日、トロント日本文化センター/トロント)



狂言レクチャー・デモンストレーション

茂山狂言会の狂言師・松本薫氏によるレクチャー・デモンストレーションを在トロント日本総領事館ならびにヨーク大学との共催で実施した。冒頭の講演で松本氏は、狂言は「笑い」の伝統芸能であると定義し、笑いが持つ力、静寂美と理解されがちな日本文化の異なる一面を紹介するのが狂言の役割であると述べた。壇上に数名の観客を迎え、狂言の基本姿勢や歩き方・動作・発声法を指導し、最後に「那須の与一」「猿歌」を披露した。日本の伝統芸能に初めて接する者が大半であったが、松本氏の観客を引き込む語り口、活気あふれる実技により、公演時間2時間余の間、彼らの集中力は途切れることなく、松本氏と170名の観客が一体となったレクチャー・デモンストレーションとなった。

- 「月の岬」翻訳朗読上演(2004年1月9日~10日、トロント日本文化センター/トロント)

クロウズ・シアターに制作を委嘱し、松田正隆氏の戯曲「月の岬」(英題Capemoon)を翻訳朗読上演した。本事業は役者が台本を持ち簡素な舞臺で演技をする朗読上演という斬新な形態であったが、制作陣に限られた空間を大胆に活かし、原作の詩的な雰囲気や十二分に汲み取りわかりやすく舞臺化したことにより、観客から高い評価を得た。また観客の多くは、登場人物が抱える問題や日常に潜む歪みを鋭く提示する一方、安直な結論を導き出さず、全てを観客に委ねセリフの行間を読ませる手法が興味をかきたて新鮮であると評し、日本発の戯曲を積極的に楽しみ、その独自性を考察する姿勢が印象的であった。

- 日加修好75周年記念シンポジウム(2004年3月1日、トロント大学マクセンター/トロント)

日加修好75周年を記念し、センターとトロント大学マクセンターの共催でシンポジウムを開催した。本シンポジウムでは日加両国における高齢化社会、建築・都市計画、現代日本の映画・文学をテーマにした3パネルを設定し、計8名の日本研究者が発表を行なった。聴衆からは、現在の日本の姿や社会問題を捉えるだけでなく、それらの情報をカナダの社会問題と比較考察する機会を持つことができる相关性に富むシンポジウムであったとの声が寄せられ、修好75周年にふさわしい事業となった。



月の岬翻訳朗読上演

米国

<概況>

2003年3月に始まった米国とその同盟国の対イラク軍事行動は、一部にあった長期化の予想を覆し、約2か月という短期間でフセイン政権の崩壊をもたらした。2003年5月1日のブッシュ大統領による戦争終結宣言により、2001年9月11日の同時多発テロ事件以降米国が推進してきた「テロとの闘い」は一つの区切りを迎え、安定した支持率を背景に、米国政府の対外政策は新たな段階に入ると予想するむきもあった。しかし、その後の米軍によるイラク占領統治下でのテロの頻発、武力衝突の激化や、ブッシュ政権が先制攻撃の論拠とした大量破壊兵器が発見されない、といった事態が生じたことにより、米国は年間を通じ国内外で困難な政策の舵取りを余儀なくされた。また、イラク情勢だけでなく、イスラエル・パレスチナ間の問題も引き続き予断を許さない状況が続いている。

他方、国内情勢に目を向けると、経済は引き続き好調であり、安定した成長を続けているが、その好調さが雇用の増大につながっておらず、失業率が高止まりしていることが問題点として指摘されており、2004年11月2日に投票が行なわれる大統領選挙においても、イラク復興をはじめとする対外政策とともに、雇用、年金、医療福祉といった国内経済政策が、今後大きな争点となることが予想される。

ニューヨーク事務所

1. 日本との文化交流事業

政治・経済面での安定した日米関係を背景に、基金事業のほかにも官民交えさまざまな文化交流事業が全米で展開された。とくに2003年はペリー提督の浦賀来航から数えて150周年に当たるため、これを記念する事業も数多く執り行なわれた。

美術の分野では、日本人現代作家の活躍と米国美術界への浸透ぶりが増す顕著に見られた一年であった。森万里子「ウェブUFO展」、杉本博司氏の写真インスタレーションは、いずれも米国の主要美術団体のイニシアチヴによって実現したほか、2003年9月にはロックフェラーセンター前広場に村上隆氏の巨大インスタレーション「二重螺旋逆転」が登場、日本のアニメとオタク文化に対する一般の関心を引き起こした。これら日本人作家の目覚ましい活躍の背景には、日本の現代文化に関心を寄せる米国人の学芸員や批評家の存在があることを忘れてはならない。

イラク戦争の影響で外国人に対する査証発給が厳格化され、申請から取得までに長期にわたる煩雑な手続きが必要となり、海外からのアーティスト招へいが格段に困難になるなかで、日米間の舞台芸術交流は着実に進められた。とくにコミュニケーションの上で言語の違いが比較的問題にならないダンスの分野では、両国のアーティストが対等な形で共同制作に取り組む複数のプロジェクトが行なわれた。Attack Theatre (フィラデルフィア)とニプロール(東京)の日米両国での創作活動と公演は、その好例と言えよう。他方、日本の伝統芸能に対する人気も根強く、2004年3月の能楽協会ニューヨーク公演は連日満員御礼を記録する成功を収めた。

映画関係では、『キル・ビル』『ラスト・サムライ』『ロスト・イン・トランスレーション』といった日本を題材に取り上げたハリウッド映画が次々と封切られ、また、山田洋二監督の『たそがれ清兵衛』がアカデミー賞外国語映画部門賞の候補に残り、その後ニューヨークとロサンゼルスで一般公開されるなど、近年になく日本が大きな存在として認識された1年であった。2003年秋には小津安二郎監督生誕100周年を記念し、ニューヨーク映画祭で同監督36作品の回顧上映が行なわれ、大好評を博した。小津特集はその後、西海岸(バークレー)にも巡回したほか、シカゴ国際映画祭では初期の小津作品が活動弁士付きで上映されるなど、小津監督の世界映画史上に残る業績と、同監督作品の現代における意義が見直される好機となった。

2. ニューヨーク事務所の活動

<活動方針>

ニューヨーク事務所は、全米に対する日本研究支援事業、舞台芸術交流事業および日米親善交流事業を行なうと共に、美術・映画・出版といったその他の事業については、ロッキー山脈以東37州をニューヨーク事務所が、残り13州をロサンゼルス事務所が所掌している。なお、全米に対する日本語教育事業はロサンゼルス事務所が所管している。

米国では都市、地域ごとに日本への関心や理解の度合いが異なることから、現地のニーズにきめ細かく対応するため、各地の在外公館の協力を得ると共に、日本研究支援、舞台芸術交流、日米親善交流の各事業分野については委員会や評議会をニューヨーク事務所内に設置し、当該分野の有識者や専門家の助言を得つつ、現地事情に即した効果的な事業推進に努めている。

とくに2003年は、ペリー提督浦賀来航150周年に当たり、全米各地でさまざまな行事が企画されたことから、映画上映、小規模助成といったニューヨーク事務所の持つさまざまな事業スキームを有効に活用しつつ、情報の収集と提供、各種斡旋と調整に努めた。



第47回APAP年次総会における広報事業

<2003年度事業例>

- 大学巡回日本映画上映会(2004年1月18日～3月31日、オハイオ州立大学ほか4大学)

日本文化が紹介される機会が比較的少ない地域において、地元の大学などの協力を得て毎年実施しており、2003年度は、中西部のイリノイ州(イリノイ・ウェズリアン大学)、ミズーリ州(サウスイースト・ミズーリ州立大学)、オハイオ州(オハイオ州立大学)、ケンタッキー州(ケンタッキー大学)の4州4大学で実施した。

Woman in Filmをテーマにして、『細雪』(市川崑監督)、『うなぎ』(今村昌平監督)、『幻の光』(是枝裕和監督)、『たそがれ清兵衛』(山田洋二監督)の4作品を上映し、普段観る機会のない日本映画に触れる貴重な上映とあって、いずれの上映会とも好評を得ており、現代日本社会の一端を紹介する上で有効な事業となった。

- 「パフォーミング・アーツ・ジャパン」(2003年4月1日～2004年3月31日)

日本の優れた舞台芸術をニューヨーク、ロサンゼルスなどの大都市のみならず、広く全米各地に紹介すると共に、日米両国のアーティストによる新たな共同制作を促進するための助成プログラムである。2003年度は、「大駱駝艦」(現代舞踊、American Dance Festival)、「ダムタイプ」(現代舞踊、California Institute of the Arts)、「野村万作と『万作の会』」(古典芸能、Theatre of Yugen)など、7つのカンパニーが北米25都市を巡回公演し、2万人以上の観客を動員したほか、Headlong Dance Theaterとアローダンスコミュニケーション、エイコ&コマ(いずれも現代舞踊)などが手掛けた6件の共同制作は、すでに中間発表の段階から、観客およびプレスに高く評価された。

- 「舞台芸術プレゼンター協会(APAP)第47回年次総会における広報事業」(2004年1月10日～13日、ヒルトンホテル/ニューヨーク)

世界最大の芸術見本市であるAPAP年次総会において、米国のプレゼンター(劇場のプログラム編成責任者)に向け、日本の舞台芸術に関する広報を行なった。大会期間を通じて、出展ブースでの資料配布や情報提供を行なったほか、1月11日には、日本の舞台芸術に関心を有するプレゼンターを集めたブリーフィングを実施し、山口宏子氏(朝日新聞社学芸部)が現代演劇、楳屋一之氏(世田谷パブリックシアター)がコンテンポラリー・ダンスの最新状況を、個別の作品やアーティストのビデオを上映しながら解説した。これら一連の広報事業により、将来的に、米国における日本の舞台芸術紹介チャンネルの拡大と多様化が期待される。

ロサンゼルス事務所

1. 日本との文化交流事業

米国西海岸には従来多くの日系アメリカ人および日本人が居住しているが、中でもロサンゼルス地域には、米国最大の日系社会(日系アメリカ人推定約25万人)が形成されている。日系二世および三世は、茶道・華道・日本舞踊・武道を始めとする日本の伝統文化の継承に大きな役割を果たしているほか、四世以降の若い世代では、和太鼓や舞踏、アニメなどの比較的新しい分野で活躍する者もみられるようになった。

西海岸地域における一般アメリカ人の日本文化に対する関心も、従来型の伝統芸能、武道、歴史・文学などに加え、昨今はアニメ、TVゲーム、カラオケといったポップカルチャーや、鮎などの日本食、日本人プロ野球選手の活躍などに向けられるようになり、人々の生活レベルにまで浸透している。こうした大衆文化の流入によって、日本語学習者数は今後も堅調に推移するものと予想される。

2. ロサンゼルス事務所の活動

<活動方針>

西海岸の大都市地域においては、日本文化に通じたアメリカ人の専門家が多いことから、こうした専門家を擁する美術館・劇場・映画館などに対しては、主に小規模助成を通じて側面的に支援してきた。一方、内陸州の中小都市においては、日本文化が紹介される機会が非常に少ないため、大学の日本研究センターや日米協会などを足がかりに、事務所との共催形式による日本文化紹介事業を積極的に推進してきた。

日本語教育については、ワークショップ開催など、従来の日本語教師を対象とした事業のほか、日本語学習誌の発行など、日本語学習者に直接焦点を当てた事業も行なっている。また、近年は1990年代のような著しい学習者数の伸びは見られず、逆に各州の教育財政事情の悪化により、日本語を始めとする外国語教育の存続の危機が叫ばれるようになってきたことから、各学校・教育行政機関やPTAをターゲットとした日本語教育普及広報活動を開始した。

<2003年度事業例>

- 箏・尺八コンサート

尺八奏者の藤原道山氏と箏奏者のみやざきみえこ氏で構成されたデュオEAST CURRENTによる箏・尺八コンサートをサンディエゴ(カリフォルニア州)とフェニックス(アリゾナ州)にて開催した。共にプロの演奏家による邦楽コンサートが実施され



箏・尺八コンサート

る機会が少ないため、会場には多くの一般市民や学生が詰めかけた。楽器のレクチャー・デモンストレーションや、箏・尺八によるジャズの演奏など、高度なテクニックと伝統や形式に囚われない演奏スタイルが、アメリカ人には非常に好評であった。

● US SUMO OPEN 2004

ペリーが日米和親条約を締結する1854年3月31日の1週間前に相撲観戦したことに因み、日米交流150周年記念事業として、元横綱の武蔵丸親方を特別ゲストに迎えて外国人アマチュア力士による相撲選手権を開催した。当日は約500人の観衆で満員となり、200人以上が会場に入れないほどの盛況振りであった。また、リトルトーキョーで開催したにもかかわらず、観衆のほとんどが日本人・日系人以外の、いわゆる一般のアメリカ人であったほか、地元主要紙の積極的な取材も見られた。

● 日本語教育広報キットの制作・配布

昨今の地方教育行政の財政事情悪化による外国語教科削減傾向に対処するため、日本語教育の維持・開始に有用な情報を集めた小冊子と、実際の教育風景・日本語教育関係者の声を編集した17分間のビデオ・テープをセットにした日本語教育広報キットを2,000部制作し、各教育機関や在米公館などに配布した。遠く豪州の日本語教師からも本キットに対する好意的な反響が寄せられた。



US SUMO OPEN 2004